

成果の説明書

(氏名) 溝口 哲郎	(学部) 経済学部
1 重要事項	
<p>【研究活動】</p> <ul style="list-style-type: none">・2021年度科研費(基盤C)に採択された研究テーマ「腐敗・汚職の経済理論モデルの構築—経済厚生からのアプローチ」の研究活動の一環として、「縁故主義に囚われる世界」(中央公論 2023年5月号、160頁—167頁)を執筆。腐敗と縁故主義の関係について、縁故主義がなぜ腐敗につながるのか、そのメカニズムについて説明した。縁故主義の問題は日本を含め様々な場で問題にされており、腐敗などの弊害をもたらすケースが多々ある。そのため、その防止策も含めて本稿で概説している。・加えて、前年度から継続していた専門書翻訳については、翻訳を終えてチェック及び校正段階にある。2024年内の刊行を予定しているが、分量が多く、確認作業を行っているため時期がずれる可能性もある。内容は、政府の失敗に関して、プリンシパル・エージェントモデルのアプローチによって、政治家と有権者の間の情報の非対称性や政治家のタイプによってどのように政策の帰結が変わるのかを、様々な事例を使って説明している本である。慶應義塾大学出版会より刊行予定。・2023年9月22日、朝日新聞耕論(朝刊15頁)目に「腐敗の温床 弊害の可視化」というインタビュー記事を掲載。腐敗と縁故主義の問題について、一般向けに分かりやすく問題点を指摘した。同時にWEB版の掲載があり、「岸田首相の身内びいき 経済学者が語る「縁故主義」と民主主義の危機」という形で、紙面では載せられなかったインタビュー記事を拡張版として掲載してもらった。掲載されたURLはこちらとなる(https://www.asahi.com/articles/ASR9M6RMFR77UPQJ00K.html)・2023年12月に地域啓蒙活動の一環として、「地域経済研究所」の広報活動の一環としてラジオ高崎において上記で触れた腐敗と縁故主義の問題と現在の研究について概説した。 <p>【教育活動】</p> <ul style="list-style-type: none">・2023年度前期に開講した Introductory Economics の授業では、積極的にアクティブラーニングを行った。これはテキストを利用しているセンゲージラーニングのシステムで、受講生の授業の理解を深めるために e-learning システム (Mindtap) の導入を行った。経済政策論 I では、日本の政治経済をマクロ経済学の手法で評価し、後期の経済政策論 II では、腐敗の問題に関してミクロ経済学のアプローチから、考える授業を行った。・2022年度に引き続き、野村証券&日本経済新聞社主催の第24回日経ストックリーグに2年生2チーム、3年生1チームが参加した。「ペット保護」「シェアリングエコノミー」「フードロス」に焦点を当て、各メンバーが関連銘柄を調べて最終レポートを提出した。2年生は小泉秀希『株の投資大全』(ダイヤモンド社)を輪読して、証券投資に関する基礎的な知識を高めることを行った。3年生は野崎浩成『教養としての「金融&ファイナンス」大全』(日本実業出版社)を輪読して、2年生に引き続き金融ファイナンスの知識について更なる知識を深めた。	

・ゼミの第三期生の卒業論文指導を行った。デザイナーズブランドに関する分析、通信インフラとしてLINEが存続するための戦略に関する考察、日本映画産業の分析、新潟における地域ブランド化戦略、日本の少子化問題解決に関する卒業論文、が提出された。うち「日本の少子化問題」に関する卒業論文は、本学の懸賞論文にも応募している。

・対外ゼミ活動の一環として、2023年11月25日に東洋大学国際学部の平瀬ゼミと東洋大学（白山）でインターゼミナールを行った。また2023年12月2日に、日本大学経済学部の有馬ゼミと呉ゼミ、東洋大学国際学部の隅田ゼミとインターゼミナールを行った。テーマは日経ストックリーグの内容をプレゼンテーションするもので、双方様々なテーマを発表し、議論が行われた。プレゼンで触れられた内容を基に、日経ストックリーグへの最終提出に向けてブラッシュアップした。

2 その他の事項

3 次年度以降の計画・抱負

教育については以下のような計画である。

ウィズコロナの世の中になり、いかにして自分の感染を防ぎながら自分の体調管理を万全にしなが、大学のガイドラインを念頭に、ゼミ・授業を行い、学生のメンタルサポートなどを行っていききたい。また第五期生が希望する就職先に就職できるようなサポートを行っていききたい。その一環として、過去の卒業生とコンタクトが取れるような体制づくりを行っていききたい。

研究については以下の通りである。

腐敗・汚職は、市場メカニズムとは異なる賄賂などの金銭的インセンティブによって、資源配分の歪みを通じて一国の経済厚生に悪影響を及ぼす。そこで今年度も継続して、過去の研究蓄積をベースに腐敗・汚職がどのような形で国家統治や制度、市場の質に影響を与えるのかを経済厚生の評価から明らかにし、腐敗・汚職防止策がどの程度経済厚生を高めるのかを分析する。特に先進国の腐敗の問題と政府の経済政策の妥当性について「縁故主義」の事例を加えた分析を試みる。特に縁故主義の問題と絡めて腐敗の問題点について、査読論文の作成を心がけたい。腐敗の研究に関しては、啓蒙活動の方は比較的行うことが達成できているため、英文査読誌に掲載されるように、現在進行中の研究を投稿できるように引き続き努力する。